

機関番号：13103
 研究種目：若手研究（スタートアップ）
 研究期間：2008～2009 年度
 課題番号：20830026
 研究課題名（和文） 母親の内的ワーキングモデルと抑うつ傾向が子どもの気質認知に与える影響について
 研究課題名（英文） The influences of maternal internal working model and depressive tendency on maternal perceptions of infant temperament
 研究代表者
 高橋 靖子（Takahashi Yasuko）
 上越教育大学 大学院学校教育研究科・助教
 研究者番号：20467088

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、アタッチメントに関する妊婦の内的ワーキングモデルと子どもの気質の認知を通じて育児不安や抑うつ傾向に及ぼす影響を検討することである。妊婦に対して Adult Attachment Interview を実施し、妊娠時と出産 6 か月時に質問紙調査を行った。安定型の母親よりも不安定型の母親において、乳児を扱いにくいとらえた場合に、育児不安が高まることが示された。最後に、愛着理論の観点より、育児困難を感じている母親や家族に対する心理的援助について議論された。

研究成果の概要（英文）：

This study examined the influences of maternal attachment internal working model in pregnancy and perception of infant temperament on child-rearing anxiety and depressive tendency. The Adult Attachment Interview was conducted on pregnant women, and a questionnaire survey was given to them at the time of pregnancy and 6 months post delivery. The results suggest that non-secure mother that perceived her child difficult displays strong child-rearing anxiety than the secure type. Finally, in view of attachment theory, it is discussed how such mother and her family, who experiences child-rearing anxiety, be provided psychological help.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	730,000	219,000	949,000
2009 年度	510,000	153,000	663,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,240,000	372,000	1,612,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：内的ワーキングモデル、乳児の気質認知、産後抑うつ、育児不安、縦断研究

1. 研究開始当初の背景

現代の日本社会では少子化や出産の高齢

化、核家族化が進み、多くの母親にとって我が子の出産以前に子どもと関わる経験が少

ない上に、周囲からのサポートを得ることが難しくなっている。このような厳しい育児環境においては、母親の育児不安や抑うつ感が強まり、子育てに悪影響を与えるおそれがあると指摘されている(菅原, 1999)。

産後の母親の精神的健康の低さを予測する条件として、幼少期の母親の被養育体験や過去のネガティブな体験、母親の精神的な脆弱性、ソーシャルサポートなどが挙げられている(Boyce et al, 1991; Gotlib et al, 1991; O'hara et al, 1986)。一方、養育者の要因だけでなく、子どもの気質が母親の育児負担感や抑うつ気分を予測するという指摘は多い(Honjo et al, 1998; Ispa et al, 2002; Sugawara et al, 1999)。

これらの研究より、母親が幼少時に受けた被養育体験や乳幼児期の子どもの気質の個人差が、産後の母親の精神的健康と関連することが予想される。

それに加えて、子どもが難しい気質であったとしても、アタッチメントに関する母親の安定した内的ワーキングモデル(以下、愛着表象)を媒介要因として母親の精神的健康の悪化が緩和されるかについて検討される必要があるだろう。

これまで、重要な他者へのアタッチメントが、精神的健康や乳児の気質認知・育児態度などとの関連に媒介要因として作用するといういくつかの報告がある(Priel et al, 2000; Pesonen et al, 2004; Edelstein et al, 2004)。しかし、これらの調査で扱われた被養育体験やアタッチメントスタイルの測定には、親や現在のパートナーといった重要な他者について自己報告式で尋ねる尺度を用い、回答者の意識的・表面的な部分に焦点を当てている。実際の養育場面においては、“赤ちゃん部屋のお化け(Fraiberg, 1975)”と呼ばれるような自らの第一次アタッチメント対象からの被養育体験についての意識面のみならず無意識的なイメージ、すなわち愛着表象が深く関与すると考えられる。そのため、アタッチメントに関する感情や思考などの意識・無意識面での情報処理を考慮した、より妥当性のある検討が必要とされている。この点に関して、Mainらが提案したAdult Attachment Interview(AAI: Main et al, 1984)は“無意識を驚かす”ことを目的とした半構造化面接であり、実際の被養育体験よりむしろ幼少時の関係を回想する態度を分析対象とすることから、本研究での愛着表象の測定に有用であると考えられる。

さらに、本研究では母親の愛着表象と子育てをめぐる人的資源との関連を調査するた

めに、育児に関するソーシャルサポートについて取り上げる。

2. 研究の目的

本研究の目的として、第一に乳児に対する母親の気質認知と育児不安、抑うつ傾向との関連について検討する。生活習慣に関する食事場面や対人接触場面、睡眠などの生活リズムに関する乳児の気質の各側面において扱いにくいととらえられた場合に、母親の育児不安や抑うつ傾向が強まることが予想される。第二の目的として、乳児の気質が扱いにくいと知覚された場合に、母親の愛着表象が安定したタイプであれば、育児不安の緩和要因として働くのではないかと予測する。さらに、第三の目的として、妊娠時の愛着表象と出産後の知覚されたソーシャルサポートとの関連について検討する。

3. 研究の方法

大学病院産科を受診し AAI の実施に応じた 136 名のうち、出産 6 か月後の質問紙に回答した 62 名を対象とした。初回調査時の平均妊娠週は 18.5 週、平均年齢は 30.0 歳であった。

各時期の調査内容として、妊娠中期の調査時には、母親の年齢・学歴、世帯年収といったデモグラフィック変数や妊娠の状況について健診の待ち時間に尋ねた。

妊娠中期調査の約 1 か月後、健診の後に AAI(Main et al, 1984)を実施した。出産 6 か月時の調査時には、抑うつ尺度(EPDS: Cox et al, 1987; 岡野ら, 1996)、育児不安尺度(Maternal attachment scale: Nagata et al, 2000)、ソーシャルサポート尺度(家族の育児に対する協力の度合い)、乳児の気質尺度(Revised Infant Temperament Questionnaire の日本語短縮版(Carey et al, 1978; Sasaki et al, 2006))からなる質問紙を郵送し回収した。

4. 研究成果

本研究の AAI の分類は、愛着離脱(Ds)型が 11 名(17.7%)、安定自律(F)型が 49 名(79.0%)、とらわれ(E)型と未解決(U)型がそれぞれ 1 名(1.6%)という結果となった。この結果から、欧米との怒りの感情表出や宗教観に対する文化差、そして今回の調査対象者の特徴について考察した。

出産 6 か月のソーシャルサポートについて、不安定型より安定型の女性でより多く知覚される傾向があった。AAI が不安定型であると他者のサポートを遠ざけてい

るか、もしくは潜在的なサポートを少なく見積もりやすい傾向がうかがわれた。

育児不安および抑うつ傾向についてはAAIの型による有意差はみられなかった。

次に、AAIの安定・不安定型を媒介要因として加えて気質認知と抑うつ傾向および育児不安との関連について分析を行った。

母親の抑うつ傾向と子どもの気質認知と愛着表象との間にはほとんど差がみられなかった。しかし、不安定型の母親において難しい気質と育児不安との関連が示された。愛着表象が安定型である母親よりも不安定型の母親にとって、偏食が激しい、生活リズムの変動が大きい、泣いたりむずかることが多い、または扱いが難しいと乳児が感じられたような場合に、育児不安がより一層高まることが示された。一方、安定型の母親の育児不安は、不安定型ほどに子どもの気質認知によって影響を受けることはなかった。

その理由として、第一に安定型の母親は子どもの個性にそった応答性を働かせており(Ainsworth et al, 1978; van IJzendoorn et al, 1995)、育児不安が喚起されにくいという可能性が考えられる。また、安定した愛着表象がソーシャルサポートの高さと関係していることより、愛着表象だけでなくソーシャルサポートが育児不安に対する間接的な防御因子となっていることが考えられた。

以上の結果より、養育者一般に対する臨床的援助に関して以下の2点が示唆できる。第一に、妊娠期から始まる子育て支援において、養育者に対するソーシャルサポートが重要だろう。具体的には、水野(1998)が考察するように、子どもの気質的個人差に関する情報や知識、具体的に生じやすい問題行動や対処方法について心理教育を行うことによって、養育者の育児負担感を軽減できるだろう。また、養育者が気軽に子どもを預けて気分転換できるような社会的なサポート体制がより整備されることが求められる。さらに、気質が母親自身の評定によることから、評定者の主観的な要素が含まれる(Bates et al, 1984)ことが考えられ、子どもの行動に関する母親の認知と援助者の観察とのズレについて取り上げていくことが有効である。今回の結果より、不安定型の養育者は、子ども

の問題で悩んでいたとしても周囲に相談することに抵抗を感じやすい可能性が示された。そのため、養育者やその家族・地域だけでなく援助者を含めた上で機関内外のチームによる積極的な連携・介入やネットワーク作りが求められる。

第二の援助のあり方として、子育て相談を実施する際に養育者に対する援助的配慮が望まれる。不安定型の語りは、被養育者の関係性の想起において過度に防衛的であったり、あるいは過覚醒の状態にあるのが特徴であり、他の重要な他者との対人関係においても同様の方略を繰り返す傾向にあることから、子ども自身のアタッチメントの不安定さとして伝達されやすい(van IJzendoorn et al, 1995)。このような世代間伝達を防ぐために、Fonagy(1996)は、‘観察された’母親の感受性が親子関係の性質を決定するというよりも、むしろ‘内省機能(reflective functioning)’、すなわち母親が自他の心的状態を理解し一貫したやり方で心的状態を観察する心構えを持つことによって、子どもの安定したアタッチメントの発達を促進させることができると述べている。援助過程において、母親自身が防衛的にならず感情をこめて振り返り、自分や子どもといった重要な他者の心的状態の複雑さや多様性、そして心的状態と行動との関連の理解を図ることが一つの援助目標となりうるだろう。

このように、養育者とその子どもに対する心理的援助に関して欧米では、養育者の内省機能や感受性の発達促進を目的とするもの、さらには親子相互作用の改善、環境調整を目標として様々な実践が積み重ねられ、短期的・長期的な効果について検討されている(van IJzendoorn et al, 1995)。日本においてもAAIを用いた養育者の愛着表象の臨床的介入や査定についての研究が蓄積されることで、養育者の精神的健康の向上や養育者と子どもの良好な関係性の発達促進の援助に寄与することが期待される。

本研究の限界としては、調査対象者の人数が少ないことが挙げられる。また、AAIについては、従来の欧米研究と比較して安定型の割合が高い結果となった。今後、臨床的介入や治療についての具体的な示唆を得るには、臨床群を対象とした調査が必要であろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 金子一史・高橋靖子, 外3名, 母親の抑うつと母親から子どもへの愛着に関する縦断研究, 一妊娠中期から産後1カ月まで一, 児童青年精神医学とその近接領域, 査読有, 49(5), 2008, 497-506
- ② 高橋靖子・瀬地山葉矢・本城秀次, 子どもの登校しぶりで来談した母親の内省機能アセスメントの試み-AAIと夫婦同席面接による検討一, 上越教育大学心理教育相談研究, 査読無, 9, 2010, 51-61

〔学会発表〕(計4件)

- ① Kaneko, H., Sasaki, Y., 外3名, Depression and maternal attachment in Japanese women during pregnancy and postpartum: A longitudinal study, 11th World Congress of World association for infant mental health, 2008年8月3日, 横浜
- ② 高橋靖子, アタッチメントとライフイベント(ワークショップ「成人アタッチメント研究の最前線(3)」話題提供) 日本心理学会第72回大会, 2008年9月18日, 北海道
- ③ 高橋靖子・瀬地山葉矢・本城秀次 母親の未解決の喪失・外傷体験と子どもへの態度との関連
-Adult Attachment Interviewによる「未解決の心的状態」の検討より- 日本発達心理学会第20回大会, 2009年3月25日, 東京都
- ④ 瀬地山葉矢・高橋靖子・本城秀次 Adult Attachment Interviewにおける語りについて
-Dismissing型の語りの特徴と変容- 日本発達心理学会第20回大会, 2009年3月25日, 東京都

〔図書〕(計2件)

- ① 本城秀次・金子一史・高橋靖子外, よくわかる子どもの精神保健, ミネルヴァ書房, 2009, 全203頁
- ② 金子一史・吉川徹・高橋靖子外 子どもの発達と情緒の障害, 岩崎学術出版社, 2009, 全263頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 靖子 (Takahashi Yasuko)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・助教
研究者番号: 20467088

(2) 研究分担者 ()

研究者番号:

(3) 連携研究者 ()

研究者番号: